

# 日本映画学会

## 第2回例会 プログラム

2013年6月29日(土) 13:00~

国土舘大学世田谷キャンパス 梅ヶ丘校舎B203教室  
(〒154-8515 東京都世田谷区世田谷4-28-1)

- ・小田急線梅ヶ丘駅下車、徒歩9分
- ・東急世田谷線松陰神社前駅または世田谷駅下車、徒歩6分
- ・渋谷駅南口バス乗場18番「世田谷区民会館行」バスで終点下車、徒歩1分

(アクセスサイトURL: <http://www.kokushikan.ac.jp/access/setagaya.html>)

# タイムテーブル

12:30 受付開始／発表 25分・質疑応答 10分

総合司会 吉村いづみ（大会運営委員長、名古屋文化短期大学）

13:00 開会の辞 山本佳樹（副会長、大阪大学）

## <第1セッション> 司会 山本佳樹（大阪大学）

13:05-13:40 金光図書館のフィルム調査報告——映画「遅咲きの花」を中心として

世良利和（NPO 法人「文化探偵社」代表）

13:45-14:20 『Film Kurier』における『Japan』——『Die Tochter des Samurai』以前の日本映画及び映画界  
に対する眼差し 山本知佳（日本大学文理学部人文科学研究所・研究員）

14:25-15:00 これは手ではない——『グリード』（1924）と視触覚の姦通

後藤大輔（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）

## <第2セッション> 司会 碓井みちこ（関東学院大学）

15:15-15:50 ヴェトナム帰還兵映画としての『ローリング・サンダー』——捕虜体験とヴィジランテ映画

大勝裕史（早稲田大学大学院博士課程）

15:55-16:30 アルフレッド・ヒッチコックとイギリス映画産業——彼の「不満」とその後

木村めぐみ（一橋大学イノベーション研究センター）

## <講演>

16:50- 17:50 「映画製作の現場から」 岡田真（東映株式会社企画制作部 チーフプロデューサー）

岡田真氏プロフィール：慶應義塾大学経済学部卒。主な作品として、「ネオ・チンピラ鉄砲玉びゅー」（東映Vシネマ、高橋伴明監督 1990年）、「デッド・オア・アライブ」シリーズ（3本）（三池崇史監督 2000年-2002年）、「ゼブラマン」（三池崇史監督 2004年）、「エクステ」（園子温監督 2007年）、「少年メレンサック」（宮藤官九郎監督 2009年）、「中学生円山」（宮藤官九郎監督 2013年5月18日公開）などがある。現在までにVシネマ、映画合わせて50本以上をプロデュースしている。

18:00-18:20 総会 杉野健太郎（事務局長、信州大学）

18:20 閉会の辞 田代真（国士舘大学、開催校責任者）

18:30~20:30 懇親会 梅ヶ丘校舎地下一階食堂 懇親会費4千円

懇親会では、アトラクションとして、1935年のカナダ製映画用可搬型アンプの披露を予定しています。皆さん、お楽しみに！

# 発表概要

## <第1セッション>

司会 山本佳樹（大阪大学）

13:05—13:40

### ● 金光図書館のフィルム調査報告——映画「遅咲きの花」を中心として

世良利和（せらとしかず、NPO 法人「文化探偵社」代表）

2012年に岡山県の金光図書館で古いフィルム群の調査を行い、35ミリや16ミリの戦前のフィルムを約60巻確認することができた。缶ごと錆びてボロボロになったものも少なくなかったが、関東大震災の実況フィルム、戦前のニュースフィルムや時代劇、金光教本部が自主製作した劇映画など、貴重なフィルムが数多く見つかった。フィルム群の全貌については、今後の詳細な確認作業と修復保存を待つことになるが、その中で特に注目したいのは伊賀山正徳監督が日活多摩川で撮った「遅咲きの花」（1939）が発見されたことだ。

フィルムは冒頭のタイトル部分が欠けていたが、テレビ局の設備と担当者の技術を借りてチェックしたところ、物語の内容や出演者などから「遅咲きの花」と判明した。内容は貧しい家庭の娘の進学騒動を描いた喜劇で、原作は曾我廼家五郎だ。つまり、本作は同時期に撮られた斎藤寅次郎監督、高峰秀子主演の東宝映画「娘の願ひは唯一つ」（1939）の競作であり、今回の発見によって両作品の比較が可能となった。また「遅咲きの花」でヒロインを演じた星美智子は「ディア・ドクター」（2009）にも出演した現役女優であり、およそ70年前の子役時代の姿がよみがえったことになる。今回の調査は、フィルムが出てくる可能性をある程度予測して行った。これまでの文献調査で、大正から昭和初期にかけて、金光教関連の映画が少なくとも10本前後製作されていることが判明していたのだ。また牧野省三や中村錦之助など、金光教の信者に著名な映画人がいた事実も見逃せない。こうした背景を考えれば、今回のフィルム群は「あるべき場所にあった」とも言えるだろう。

全国各地には、同様の未調査フィルムが不適切な保存環境の中で数多く眠っていると推測される。諸機関と研究者が連携して組織的に調査を行う体制作りや、修復費用と保存場所の確保、寄贈手続きや権利関係、一般公開の機会など、今後取り組むべき課題は多い。

13:45—14:20

●『Film Kurier』における『Japan』——『Die Tochter des Samurai』以前の日本映画及び映画界に対する眼差し

山本 知佳（やまもとちか、日本大学文理学部人文科学研究所・研究員）

『Die Tochter des Samurai』(邦題：新しき土)は、我が国とドイツの合作映画として1936年に製作され、翌1937年に日本・ドイツ両国にて公開された。その前後に両国は二度の防共協定を結び、政治的・軍事的に関係を深めていくことになる。以前にも『BUSHIDO』(邦題：武士道 1927年)などの合作映画の製作は行われてはいたが、本作品の様に政治的背景を持ち、文化的な相互理解の観点から製作された作品は皆無であるように考えられる。

本発表では、当時ドイツの主要な映画雑誌の一つであった『Film Kurier』(1919年—1945年)の記事を取り上げ、『Die Tochter des Samurai』公開以前のドイツにおける我が国の映画作品及び映画界に対する認識を得ることを目的としている。主に比較的注目を集めた『Im Schatten des Yoshiwara』(邦題：十字路 1928年)や『Kagami』(邦題：鏡 1933年)の批評や、映画製作、検閲制度、活動写真弁士など、誌面に紹介された我が国の映画産業や映画文化の記述に注目し、『Film Kurier』が描く『Japan』がどのようなものであったのか検証したい。

14:25—15:00

●これは手ではない——『グリード』(1924)と視触覚の姦通

後藤大輔 (ごとうだいすけ、早稲田大学演劇博物館招聘研究員)

本発表の目的は、特に『グリード』(1924) に現れる〈手〉の表象を読む実践である。先行研究はこの表象をほぼ見落としてきたが、それはなぜか。概ね 1920 年代初頭に始まり現代へと至る、エーリッヒ・フォン・シュトロハイムの監督作品に関する言説を時系列的に見ると、奇妙な点に気づく。同時代の関心に限らず、歴史的、理論的、評伝的、批評的アプローチなどに見られる様々な言説群が、彼の言う〈真実〉というあまりに素朴な観念をめぐる、共通する一定の諸特徴（同一性）を不気味に維持し続けているのだ。まるで各言説が自らの賭金を無効とすることに予め同意していたかのように、〈真実〉は各言説によって反復され、「歴史的-評伝的なく作家」と「美学的-様式的なくリアリズム」の問題へと巧みに変装する。それらが相互に作用することで〈作品〉は〈近代的-視覚的〉な言説編成に基づく統一体として構成される。それは既に二重化されているにもかかわらず、視認可能な正当性を事実確認的に奪取することになる。しかしながら、そこに本来の意味での〈盲目〉が必然的に生じうるのではないか。いわば〈近代的-視覚的〉体制下においてこそ生じる視認不可能なものの行為遂行性、例えば〈触覚的〉なもののスキヤングルである。そこで本発表では、ショシャナ・フェルマンによる J. L. オースティンのテキストの読みを導きの糸としながら、同作品に多種多様な様相で繰り返し執拗にフレーム内を占領する〈手〉の表象を解釈する。おそらく、これは手ではない。単に視認可能な肉体の一部や触覚の直喩の問題に還元されるものでなく、むしろ〈視覚的〉体制を壊乱するという意味での〈触覚的〉な表象が有する可能性ではないか。このように〈視覚的〉なものと〈触覚的〉なものとが入り混じる場所として〈手〉の表象をパフォーマンスに読むことによって、先のシュトロハイム研究に関わる〈近代的-視覚的〉なく作者)及び〈リアリズム〉に関わる旧来的な問題のみならず、映画メディアの感性論的な問題として彼の〈真実〉の根本的な再考を試みる。

## <第2セッション>

司会 碓井みちこ（関東学院大学）

15 : 15—15 : 50

### ● ヴェトナム帰還兵映画としての『ローリング・サンダー』——捕虜体験とヴィジランテ映画

大勝裕史（おおかつひろふみ、早稲田大学大学院博士課程）

1970年代後半のヴェトナム帰還兵映画は、ヴェトナム戦争の敗戦処理を主題としている。換言すれば、ヴェトナム帰還兵が、心に現れる戦争の負の影響に、つまりポストヴェトナム症候群に対処する物語である。ヴェトナム帰還兵映画の提示する対処法には、二つの傾向があった。一つには、主流映画を中心に、帰還兵を「共感すべき犠牲者」として描き、その死や傷に対する「悲哀の仕事」（フロイト）を表象する作品群があった。例えば『幸福の旅路』（*Heroes*, 1977）、『帰郷』（*Coming Home*, 1978）、『ディア・ハンター』（*The Deer Hunter*, 1978）である。他方、少数のB級映画を中心に、帰還兵を「復讐のヒーロー」として描き、彼らの復讐の暴力により、敗戦の負の影響を「悪魔払い」するような作品群があった。例えば、『ローリング・サンダー』（*The Rolling Thunder*, 1977）、『殺人暗黒指令』（*Good Guys Wear Black*, 1978）である。

本発表では、復讐の暴力をスペクタクル化する70年代後期帰還兵映画の範例として、『ローリング・サンダー』を分析する。本作は、ヴェトナムで7年間捕虜だった帰還兵が、妻子を殺した強盗団に復讐する物語である。ヴェトナム帰還兵映画史における本作の意義は、正当に評価されていない。一般にはせいぜいカルト映画であり、先行研究は過激な暴力表象を専ら問題にする。だがヴェトナム帰還兵映画において、帰還兵のトラウマとしての捕虜体験を直接表象したのも、捕虜体験と戦後社会での復讐の暴力を組み合わせたのも『ローリング・サンダー』が最初である。サブジャンルの観点からは、テキストは、ヴィジランテ映画（法によらない私的な報復をスペクタクル化する60年代後半から70年代前半に発展した映画）のヒーローとして、捕虜体験のトラウマを持つヴェトナム帰還兵を初めて登場させたと言える。この組み合わせは、80年代に展開するヴェトナム帰還兵映画の一つの定型となる。例えば、『エクスターミネーター』（*Exterminator*, 1980）、『ベトナム帰りのすごいやつ』（*Ruckus*, 1982）、『ランボー』（*First Blood*, 1982）である。発表では、テキストの細部に配されたヴェトナム戦争の隠喩を解釈しながら、テキストがいかなるヴェトナム戦争のアレゴリーを織り成すか見たい。

15 : 50—16 : 30

## ●アルフレッド・ヒッチコックとイギリス映画産業——彼の「不満」とその後

木村めぐみ（きむらめぐみ、一橋大学イノベーション研究センター）

2012年夏のロンドン・オリンピックにあわせるかのように、イギリス映画協会が世界中からの観光客たちに用意したのは“*Genius of Hitchcock*”と題した企画であった。まるでアルフレッド・ヒッチコックが「イギリス」が生み出したことを強調するための大々的なキャンペーンのようなそれは、じっさい、「イギリス時代」のヒッチコックとその作品に焦点が当てられていた。

ヒッチコックがロンドンに生まれたのは1899年、イギリスで映画産業が成立しようとしていた時期のことであった。彼がその *Pleasure Garden* という作品で映画監督としてのデビューを飾ったのが1925年、その作品が公開されたのが1927年である。この年は「スクリーン・クォータ」が導入された年であり、イギリスにおける映画産業と政府との関係の歴史、すなわち、＜ハリウッドへの対抗と依存の歴史＞とも読み替えられる歴史が幕を開けた年でもある。

その歴史は、サッチャー政権（1979年—）、ブレア政権（1997年—）の誕生によって二度の大きな「変化」を経験している。奇しくもヒッチコックが他界したのはサッチャー政権発足から約1年後のことであったが、「スクリーン・クォータ」をはじめ、ヒッチコックが生きている間に導入されたさまざまな制度が法（1985年映画法）によって撤廃されたのがサッチャー政権時のことであった。彼は生前、検閲制度や人材、資金の不足など、イギリス映画産業に対して数多くの不満を書き残しているが、その「不満」こそ、彼の死後のイギリス映画産業の「変化」を読み解くにふさわしいものである。イギリス映画産業が最も多くの映画を生み出した1930年代の終わりに彼が渡米したこともまた、イギリス映画産業の歴史においては重要な意味を持っていると考えられ、本発表では、アルフレッド・ヒッチコックが語ったイギリス映画産業の「問題」からサッチャー政権以降の「変化」を読み解いていく。

## 日本映画学会

会長 松田英男

大会運営委員長 吉村いづみ／開催校責任者 田代真

事務局 信州大学人文学部 杉野健太郎研究室内 〒390-8621 長野県松本市旭 3-1-1

事務局メールアドレス [japansocietyforcinemastudies@yahoo.co.jp](mailto:japansocietyforcinemastudies@yahoo.co.jp)

学会公式サイト <http://jscs.h.kyoto-u.ac.jp/> 学会公式ブログ <http://jscs.exblog.jp/>